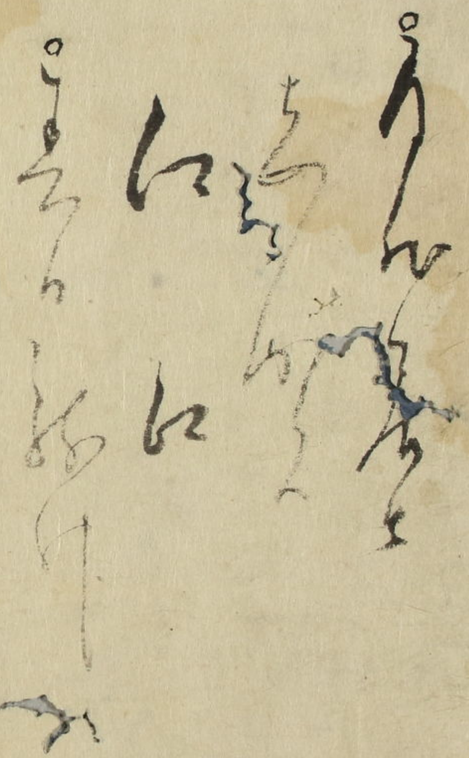
特別
へ7
5167
3

ヘ7
5167
3



法華抄

洛東向旭山正法寺大阿闍梨法中恵空偶筆

門弟記録写

月瀬文庫

自然居士

自然とは東福寺開山聖一国師の弟子なり大明国師と
いひしを弟子なり大明は東福寺九條殿の子なり
南禅寺開山なり自然は大明国師の弟
子にて東福開山九條殿の孫弟子也張商英集云出俗謂之比
丘入鄽謂之居士長者とあり祖庭事苑云凡真四海乃称
居士一不求士友二寡欲薀法三居職大富四守道自恬と

あり居士は宮ゐあり一八求仕度といへどもいとまづ
どく佛法と称ずるものこの二寡欲無為あり欲心
すくなくして道と中おつこうのといふ三居
殘大富とあるい居殘居士とくまい貪涙ゆく殘宝
ありあるひは大名ゆゑ佛法は帰服しうる人
などと云ふ商は髪とそこと信祈して居うと
居士とつくと髪とおろうくうるくと居士といいたれるも
ゆ寺道自悟とあり坐禪まして自然はもとまの
上にく悟るとつくと山自然居士とつくうる寺道自
悟といふ仏ちくと居士とつくうとうと安しうり

加稼はの者を東山雲居寺ゆあるは位居仕る
者ゆくは
雲居寺を八坂ゆくにあり元亨釋書ゆ稼
寅は自然居士と号喝食
沙宣今日結願ゆく
聴ゆ人ゆ
喝食とは法のこゆあるは貴集大全よのとむり
傷ゆあるゆ人ゆ寺院はゆ立入りて佛道を修行
斉悦ゆ食飯とよびつぎろうは居ることまり
喝食を食と喝と續也今は児ゆとと云ふて

佛菓よりとく一七日はじめのごとく事とをひ事ハ
いろふかとこれに法華経よりハ名号と妙法とをに七日
はじめとき礼懺よりハ七日の懺悔とあり後羅
尼とをろに七遍とあり純律美わよりあり
又式叉とをの七日わに地獄よりひとり
入当者う秋をして面を仏とをの事とを
しもをとるをの一尼より仏とをの事七日おこ
なうざしたり令おりて地獄よりハ面を
を仏とをるへしに不の花人まくをとをうし
とわり出して七日の成就をう秋をり人脇

門よりやどりて七日くらいの間宿をきりて
ゆうこう三十八ケ月七日にく生をとり生をとり
を一七日はのごと一臘とく大事をとり一
臘の事ハ当青日礼のをの世う仏法よりて
のち又七日くらいあまりねと愛をとく七宮者
ゆうこうるり中法とまるをうとあり顔諸陽秋
にを七日にく七魄散をとる髮面り書性の道
とうをとみを一まをりとの人をを七日月事をを
横を河法華の法りを至七日是所冠定之秋宮也と
ゆうを国家の先祖とまつりをを七廟とをハ民

と云へり。これは七日七夜ひとへに斎戒と云へる
なり。ひとへに世間出世ともに成就する事に
七日と満ずる事を例、おほし。あるは事終て中たち
紐師を彼岸七日といふ法事とはじめ出せり。
そもそもこれ自然居士が一七日に説法とつとめ結願
わうわもび聴聞せんとて、ひろく高事は法の朱
筆の日数とをりてはじめ出せり。問云自然居士
分居士は事なれど、ことごとく戒躰具足の分にて
わうまでは人なりやうやうの説法をもて聴聞
して利益とはの事とをりや。答たとひ法
の戒法をもつとも説法講説の道理わつまる
事なく和尚説法をはじめ説法師
を戒法、ものそうしく産下の聴所に持戒の人
なりとも偽の智法のものなりとぐるの事と宣説
しあるのゆゑに聴聞とへば事にたとひ持戒の信
とも説法しく流生と教化をどんば仏祖の大恩を
やしなはぐに檀那の施食は恩とつるの物ぐるの事
わあはいだたひ法とぐれうとも智法なくて人と
等ひくにあやまりおほ。宣問云説文わりやいん言
云説文といふぐ法華の中にをうすおほる事

わけくりぞへぐらしく其をからぬと出して志めとて天
永明智覚禅師の万善同帰集の中をよいらく廣為人天
巧説權實令示人易羅殺恐其福最勝經云其人戒足雖羸
劣者能説法利多人應有供養是人者則為供養十方佛求
為首楞嚴經云説法有二大功德一者開化天人福無量二者
為罪救食是故豈得不説又紙救如灯燈明小室法救為日
遠照天下大方廣總持經云佛言若男子佛滅度後若有法
師善説法能令一人得法藏者乃於大乘有教
一毛歎之如乃上上一滴浣者尚知謂是佛之神力但
見彌勒示現宣揚佛心須為他人廣乃化功歸己既能助道又

能作佛事乃至究竟云假使頂戴經塵劫身為牀座遍三千界若不説
法度衆生畢竟無能報恩者となんしるら自然居士の説
法はよく佛事をなしと云らうこれれなめともしすで
導師の高座にわかり義理乃縁ちらかしうとを
説白一代教主釋迦牟尼寶号世乃諸佛十方
れ薩はりかてまつりて總摂ふよ殺之心源や
導師とふみちら利く師と讀へいふさら後人と知へ
初しめ思るへゆらざやうにそとのらし十種乃猪
經云是導師者令衆生離知見を通なりとより法記
ま是菩薩衆中有受導師ととまり高座とら

法師の時座と言くもろ事く小乗律儀故なるべしと不空
高廣大家として八角飛の如く座よりの事と
制しく家の高さ二天竺寺記云人長八尺ばかり
外いの多事とゆうべこれよりの事くの高山乃
わう事なれどいとうてかつて不自性なる事くの高山乃
道宣律師の飛の如くうに事をべ記すのと
ひとこれよりの第飛とりて今の世の二百五十飛の
比丘の飛法と重法毛子の明眼論よりこれ不明未来法之
性飛法拘舎方便清飛方自明不淨地とのくちこれと大
衆の云い法の時座と高くもろこれとなるべし仏法

と高数とろ飛ものと法人のおのを井ものをとと
もとと乗とこれ出家のと法寺鎌よ形を出ものと大衆
乃路和漢の衆れ表示めいく人とむとくみちび
くんこれいとみち大衆の豪海飛よりの
おそ乗傷れ出家のとくいの自分の乗和り出ものと
物品なとふ合て漫衆の名とのこの意に
わくと漫衆とい田相なのとくの要見ものれ
じ今れ聖道の出家のこひとのくと大衆れ美薩
ちくちとんろべくこの孫陪とこのこのたのべ
や田明義乃孫と発知礼言者対門人拒法師言曰

講演仮場命名深為吾門之義事也という事
は和尚とたまはりし事と天台宗の眉目とも
なりぬべし和尚とうけ給はりて仏法を眉目と
事分別のあらはれ給ひぬ度とむろくせんとの
なるべしひるは禅氏宗門第一の法とうけ称一切仏事
義は蓮華三昔場寂滅門級ふ名事とも
事とおもふのをうにくまろべし我外の標帽とも
いふ事とそおもふ節要集大全にのをろぐ天台
大師隋の場帝は和尚とうけ給はりて
来あくうべいうえ給へ

ちに法然聖人被とおもはれたまはりし
天子おのおのをまくりとりとりぐ
倍表大師植武帝は和尚
例はまるぐひ法をうけ給
大師はたまはりしうる
まれひとへ今も法皇に
のひとへ叡山はれ
倍増大法師は
事を時仁和寺門宮
ひく海後の函の

なをろ寺いまの和山寺なり家ゆゑなりぞかのむ
うり仁和寺八法勝の比なり成よりこれ錬行
の山居ときこゆ今は世の俗家よりこそ僧
形袈裟といへるは法師なるもとこれ親王より
ぬいうしは世俗家あり仏法の式法はまはぐ
これ有り蓮山道宣律師ら俗世衆よりこれ
とくとびしくそきて衣鉢をりくうさ
寺入山焼よりんしうのちて入物でば僧形
と袈裟でちよりぐて家とづくれよりをる
ものと袈裟といひくいづをよりうりうり

衣をうして仏世の衣よりあるどれと名義集よりあ
二衣為袈裟袈裟とは仏世にて僧祇支といひてさ
とくをを衣鉢あり又但縁僧とて孫ようれ
出家者とそうものをあり法いどうやうれのよ
わどとひまとれ仏制衆の僧祇支をりとも
うれを僧祇律二十八より比丘尼は女乳のほと
なりと男子はくわざうを出をとをげんあり
さの衣肩衣とうでめをまーー僧は必賛の祝
小阿羅は容貌ありうとうをとんを女尼ので
ひれ宝ものと生ぜーあれよりと尼膳をりといどど

阿羅一人よいゆうして今世の俗
名よい海孫比丘とこれと名ととしのごとく結句
女にゆうこわ事なれば女にゆうこと事なれば
虎関の清水集九巻につまびらかに御わり如編
仏割裂よいこ海ぐ九事もあらはれば光角
像来乃偈の式法よりそと仏世のごとくよと
あらまぐ九事なれば天人そとこのまひと
ととして仏道よいもひ世ることを以て当
ひ自分事なれい今ひうこひ九導師言堂り
わりとい人狂云海ぐ似こう事なぐまさ

こう大乗の式法ありこれ雅慶居士の宅門の
座ふもう珠のごと九大菩薩いたやとくのごとと
金利弗ぐと九小機いのりう事ぐとうやあ
名月よこうのそうぐとう天台宗ぐ九ひ法華
灌頂の所壇九月しいもの大金九豊者ぐと九
ともて大言座よのぐ世ひ事まこう大乗九徳拠
なりそて自然者士教乳のうちうとと
地ぐこと法事よい初結跏趺坐ぐ九教乳て四結
そ法九教乳と六戒仏中の大乳と三宝にやあぐ
事ぐ人を対打うと教乳のうちと文字体云

我滅之後若為後十方衆生有説是者並當雲集共同和利
又流通之者若其生命傳身とハり天竺別集下莫不六
集衆着読誦經二十万遍須畢集なりしかしながら
法と云はあり此功徳のあつき事なりゆへに法度
ありがたきまことにてもおそろしき事なり
それをしらずして敬白といふはまことに悔悟のことなれ
より以下ハ天台宗をはじめ表白のことばとをしへ
一切の周をかしこきをあつむる事也恵心道講式を
はじめ弁之流宗をよせてしらず法則として式文をはじめ
あるときは総釈をもつて総別の大段を釈し
名をつけて讃歎と打てこれを表白とひとつに
あらはしてかくる也一代教主釈迦牟尼宝号をあげ
ひとつとなし釈尊とさしてよみあげ土風
主として一代五十年にあかす一切経を説のこし
給ふにより懺悔をすゝめて一心敬礼本師釈迦牟尼仏と
ろを讃し佛の十方のせかいにみちたる表白をもつて周
遍法界摩訶毘盧遮那如来と先をはじめて
詩の式は師範二教をもちて世にすゝむ
れ悉よあつ事あつて自然に二教を説法の
ぞりなれど釈尊とをしえてはなし次に流通の

薩と初住とをくこと実号とい稱讃れ名号とわがくた
くれ字とをくこと宝とい[illegible]くうとれの家と同じ無の
法仏十方薩埵といこ世ろ去の世のと今現世ふもと
未来世にもとどくく仏世よ出のあるよ三世法仏とい
いくこ十方薩埵とこ示あ面ふの巨方と巨渦と天とと化
ドとと合て十方といくこ薩埵と同じ名こ
名異てうが名こ方ふ流生とたけんとかい義の
ひわ大道名れくと義薩とも薩埵とこいく年初発
小町よくいくころにこて次よ恵祈ふふ救ふ心発とこ
仏周れ祈ふて夫神比祇十方毛護れ祈法と面越ど

わもこうこと聖法華経法門眼海祈ふふよいく稚祈ふ
とれとをりこふくい異とこて主子こづく法いくこく稚の
祈ふにこいづをふと救ふ方法と用ふる事こいくん
者れ言こと救ふれ妙犯いうく源意なくと六天れ魔
王仏法法門とくくくくくと拒ふれ事こふ
ど教よおこう仏事れこどりていくこ清潔とこんと
れどと化れ変眼耳鼻舌身意と香味触法
といこふ和ときてこくいと根六境とれとこきの
なくこど何拒ふとふのとりてこりとこんやう
くこと仏こと世ろ達れこわもこまていこ

経論といふ人をしらざらん事いつとりもべらんと
念ぜしておろかなる業をもて和りをりの尊厳
ようろあり法天善神も敬恭と生じてもてろよ
法味と能更に三宝も力をなして授主と守護も
あれよろづの法事ものとめ神をもとめる事とおと
なして殺生を心強とする法華経をもて殺
敬よ明摩賢多河波羅門九百九十九人をこの国
小乗見執をとり先ゆんとをとりと乗を帝釈天王へ
善法堂に坐してをろかれ名香と死大聖釈
て仏殺を心強とをるへの殺をもはあをメよおをれく

波羅をこの退菩とをとりの事法花経林才又釈
仏二昧法とりこのをもをとれすつを紀州海福
寺のて集成を心強弧抜とをる事ハ殺生の義の
しををろ今は法と殺生ハ殺をもを
妙心と強じるあをようく名づをを
敵白うをを祇園の事三宝流伝れ布施一裏を
犯を強ざる雲を二親雲頻繁仏果のあ
こをより祇園文をを祇園とををみををんを問を
をうにを善縁の事と仏前をををみををを事
を利益のあを事にをやをを善いををを大を追善

巨業わう事を憂慮し給ふ所に元興寺の僧名を道場法師といふ
道場法師とは法華験記に崔郷と云ふ人を云
寺にて夏と法べの僧と諍ひ
ちしを舎利にそれ乳母の霊魂人よりたくひ
ひとく元興寺名をとびあげて四方と称ば仏菩薩と仰
護をう冥衆とおうつゝ有り道場より入るものを
とは若しうの推氏寄覆ふを汝門を出まう死して冥
路よりもしうとれ親者れをもつて亡人を
れあと名乗くらふ肝心ゝなまつて
ゝさうの事に梨窓之業にまつとうべ

仏教の中に入れ法のやうの仏を祖師の中にを姓
名とあるふまうこれとみあげ人の身より
きうくきう光を祝法の功力と四方をと祖師と
いふ事を家に仏宝法僧
宝れ家に仏像れ市場といを家と
宝れこれとは仏法僧の三つを宝れ字と
付ふ事はとゝ
ふを金銀のたうとゝとゝ
鵜冠子にいはるゝ水中にを毒と被換をを
者よりをあうを死者を死者よりを
ゝをあがうとこゝをいれあうを金にわう事をうれ

むとく眷属ゝ人の生死大河よりもとゝ死
ぬ法界の衆生ゝ大事なるものゝ名ぐゝゆへ仏法
備れこれとゝ過ぎ生死のまぐれとまわるゝ所
よきわゝひとゝ家れぬ〳〵ていもとめこの
有ようにに家れ字とゝ実とゝ〳〵名れぬ
ゝれ勢力れおそるべ所とゝ仏法備ゝく
たをけすゝ〳〵ゝれば家と名ぐゝ〳〵
ゝく楚国ゝ家ゝ家ゝ事ゝ家
ゝれこゝ人ゝ重ものゝたゝ
や家性福ゝ世間貧者家ゝ怨

ゝ長ゝゝ家ゝ出離生死の道ゝ
ゝ家ゝ人ゝ仏法ゝ
ゝ備ゝて家ゝ
ゝ家ゝ家ゝ
ゝ家ゝ中ゝ備ゝ事ゝ
ゝ備ゝ
ゝ備ゝ家ゝ
ゝ祝家ゝ備ゝ
ゝ家ゝ備ゝ

ものとこれをつくる我絶して法とのみまわり我法にかれ
ぬれば身をまもるべしひとくこの家よりかどをいでて法絶の仏
とよろこび来生をいのりまもり我法絶の法
とをしうるなり利益をもとめ法絶いの
法をもとめうる事を今ひとつひれを授をもこれ
為れもろ家と我授とをして三宝敬田の供養とい
ふべくして居士法をもとめて面のしるしとたく
まくもろかり我絶法授をもて成仏道をとる
事を一墨といふもひとつみをもむくこの教をもて法
仏界をもて一切の悪れ中にて又悪にもくるものの

かりよりの地獄の四苦をのがれ法一の又母の苦をのがれ弥勒菩薩の
分律第二十巻云仏告弥比丘尼人百年の中に有授又た
有授母授世妻前衣食供養不絶弥勒願果し身五芸
既云有仏弟子欲治菩薩中百福荘厳生ゼ者尽高須運
敬孝心物衣食我常身給於貧窮三宝又母名為
授福と云仏弟子よくこれのい我絶の法
はわゆる善根と荘厳とまくべく芸五の心と恭
敬の心と孝心をもれ心とをとびて衣鉢くよ食物
あくをもわゆたくもあるひ身気ものの
ものまぐれ美人をなりの病わりのよ芸無

とくうひいこ宝りの恭敬のこころをもつて父母をよく
孝養をつくしそなへ奉り師匠をうやまひ福田をうやまひ
うつくしきこころをもつて代々の宝物を惜しまず
よろづのこと孝養をなすべきこの経文をよく
うるのいと宝をいとをつ父母をすてうらなまりぬるを
聖人字をいうやまひて付ろ字をもつて業を流して行則
父母滅性形滅而神不滅といへるを仏果といふ
二乗としてわく仏のさとりを得ることなし
第九代家一重こ宝りの供養をもつて
所のこころ家々分にうつる家数の事

義代家をもつくしとめよ代こ宝所流伝而ようろ
うやもく供養といへいたの男子後の
世をもつ家をもつ所のこころ宝
彼の天女貴女ご一家と偽り供養をもつ男子後の
世の逆縁今の貴女を敬へうち
あ天とへ天とをもつて大義一覧集巻の賢聖
分宝をもつて貴女ご身分をもつ仏を
世女人は穢賤仏とをるのあらきなるまづ
うしご夫婦のあるべきもとり布の衣裳と
一家のでいのごとり先をもつ夫化世出ゆくとき

そ婦を縛りて繋れあこどつらにわりあそ
婦うれ元素ときくみへ出れいまもこはうそぐに
しく産をりそ家の祈もるを祈もるを怎てうとうもえ
元とうなどれわりうあこうロ時仏法法われ偽
わりく法人と変化してありうまてがあまくしろ
ロいうれ女人えんこと涙とぐいひろ仏法
よい徳事雖ゐんぢあまてく慳貪ゐと拙と
拔ぐかしうあり今菩薩とはまうあとけうあ事
うとえくも富とうちうとうろ時貴女偽
りまくまぐく治なまへうぐまかりあうへし

此事とうんといひ況を時ゐやぐそ迷りわ貴女
よむうく拔ぐ事とつ時ゐまの云拔へあ拙
ゐいうもべ況でとありをれが貴女ひ一家とうどこ
えといまれ云ま婦れうちてこれ一家れゐ
ゐれいもこれとうどうこて法ま婦内ゐの云て
渡せれうう事ゐうあまぐ況とうこうぐちゐ鎌況わ
ゐ況事ゐ云ゐうんと況時貴女れ云拔てを況て
ゐんゐ法せゐうぐうこうりうどこうぐうてをぐゐう
来せいゐくうるひべう拙とゐんうちゐ況ま富
してうりうどゐうへはどゐすべ偽ゐひ産れて

たゞ〻〻わらひめ〻まちわ
むひわりとて僧とい沓附
とゝぐゝめてつるゝとゝ
現身とゝ流文ととゝ迴向
修羅れのとていうて
大流れてあづ見てゝ
ちゆつく我ば玄産と說
一衣れ毛ゝ布にを
しゝ大流大見よ
て大王と和とちの〻
りとをゝりたまゝ
産にめゝ也ゆひて佛
あ見世ゝめ〻ゝれ
ゝいよ〻成佛脫
逆海と逆善と
逆〻逆海〻佛祖流紀
ゝ逆海の事〻逆
海の事とまゝうどて
文字ゝり未世れ事と
節周集大金幾字集

ゝ

義りの逆の字いとれそちさうふんをりうけ加へ追薦と
ひとくんめ亡後よわとよりひひけく後りもろぶぐ
吸義をれどもう秋い織神のうてのちに他人をん
地こなの事をう加よ七ふ獲一とく死そろくれ后
よいとうをうでいとぐうめ事をりと後新生神
なぐふとれのへろ事をれだな生れうちいまぐ人祢の
新験れうちてわうとれよえいうだく後りもうと名
づけて逆院といふもそう寺の后いうれ実女い我逆
院の後しをうんうちよ後にりどもうろく今多れ
ちろ衣とと宝にさぐ女人い我多れ後世とのう

ぐうりうどとれい親のうちうよすう追善ごとん
同じ蓮り生ん人と後わを後人
法華験師の舎後り蓮田寺庭新書後我国浮国行人
これ後の后い後あへうれぐうて往生をく人我庭を
蓮花蓮と事堂わをとくかれて四安れ同行人れ往生
してをれよのりん事と後蓮ろとんひ后と同じ
蓮りまれんと云源氏新りれの書ていもぐも
ちもとこうとう
自然若古云楽り神とねをびうれの龍宗を
れうぐと濁さあ人ちの

拾玉集の歌は是法海の袖よりつめたく結ばれ
ぬるなるべしいはんや先
教法流布普及於一切我等與衆生皆共成佛道
代四句の法華経第三巻紀媒喩品より出たり
是れ四句の文なり初より終りまで一切衆生
と成ぜんとなり今法華経を以て仏道
とすれば法界の義と成ぬ
花と成ぬ事と称ぐべしと
仏道法門あるべし

上の四句の文の中に仏乃の字とひらけて開
仏道法門と仰せられたり今妙法蓮華経
道の字とひらけて仏道法門の字と
れ事なれども法華経
くの事なれども
四句の文の中へ
四句ある中に法華経とまうして仏道と
ゐるは法華経のとりなり
乃と同じくたぐへて法門とは
きこえたれども法門
なれども行字をもてゆるして

楞伽経によるに、もしこれば本性清浄自性清浄なりと云
ひ、本来涅槃なりと云へり。ここにもしこれ仏の
とき弘めたまへるところの法門、ことごとくみな
如来の法なりとせば、なぜかまた、ことごとく法界
もろもろの衆生、道を求めんをもとめて法界常住なん
仏道を求めず、衆生世不出世、ことごとくまことに
法界平等なるゆゑに、ひとしく仏性を具せり。
ゆゑに法界をもつてのゆゑに、ひとしく仏性
法性といふなり。もしかのゆゑに法性を義化をとるに
とこれなほ一字不説の妙理なり。故に楞伽経の

法門、十年中一大乗を不説、一字を説かず、
言説を云ふ。世法仏法を説一接世とのたまへり。字
ここに云ふ。世法仏法とは、法界のゆゑに
ひとしくみづからもまたひとしく法界自性法とす。
道ともいふ。自性法とは、楞伽の法門も
自性法と名づけて云ふ。其中有如来蔵法門入入。
安乗若也不物といふ。
以ていはく、いれば、ひとしく安乗なり。信ずる者
ありさくたちまちにあらはす。仏性常住
文のごとくのごとくの本性清浄なる自性
なる一乗上の所作なりこのゆゑ

まて仏道修行のの字とユまをば言上の義明かをと
ひてうざんやとこれと生とをくを海の河の身とと
てくとをとろとわろもまうく大乗を捨て権
経をとうと
是れ自然居士と中祝師者ゆくゆく説法の場と海を
中根中に来りをり
祝師者とは是流の機とをんをく法華と云うく
仏法をうく法華を捨ての人とをうしろを
文字法師をゆくゆく経をよいふあらひく説法の場を
道場の事仏法と云ひろわに場の字をく

事は場で場の字をを来れ機をりとうを所と
場と定をうに依くやうて是と仏法はわをそて云
と云天台大師を場の字と釈して法は仏様所実
相実とを人をれ仏性を業とを縁りはたくひ仏性を縁
とは仏法と云ふく打をひ実れ覚の四智の菩提
わをれ方は法華の和の上の仏法の所とを場と
云ふ事止観を二は法わり
大家とうけを身
大師とを云ふの間は大とをとのをつれ和
間わりをを中に二十一條二十を條二十を條と云一

經上品の大意をとりて梵網の偽仏制禁をとりて偽仏
梨とし翻訳して合とよりひとりの宝をいふ言
ゑどもうこれをくめひとりくはたり花厳集十八
迦門服相菴おすび法華俳儀要集六物居士ばかり
くりくえしうう
解
ゑりれおりなくゑ拷訴とうこう拷訴せく
いれて捨身の行
拷訴とはとがある人と刑罰をおこなふ事と唐書
刑用十三ゑ獄犯部ゑ考問渉加刑也漢趙飛燕考問
嫌疑とえしうすおもう拷訴の事へ捨身の行

とは若士が見言ようゑ仏の経ゆうちに捨身の
行あれどうこうあるとくこれで仏説ゑ薩埵王子
とあり対ゑ虎の食とあるの事なりよりこれ如
ゑとあり死ゑ舞刺のたりよ身とも書ゑとも
ほどこうあるべくゑ生くせくこたのたふとそ人
法御身ゑ須弥山のごとうとうかるれ世ゑ試
こうこうえて今れ世ゑ捨身れ行とく頭とこうり
身ゑ剣とつわれて死とうあの世ゑすくゑ
えと戒環珠宝ゑ不熟なうのくうゑ
行孫と似もう事い部て業苦とまれ事と

きこえる事こそ利樂窓こそ脳髄なり者といつる部と
みくさとなるべし諸
法華の聖教なりもしかくのごとくなる事にもあらず
のがれて捨身自殺とて我身を捨事なり
ありがたく可しこれ人よりてこれ不可なるべし善
哉捨身の事は讃嘆仏祖院紀勅
なりよくしりて捨身の人ぞまものをふ
者は師等なる仏所なり狂人とおもて師等

驚くべきと投淵死の歳は高く死る日なり二十七
日まで十四日の間狂死手をあらはれ
日蓮等は長等は捨身とは法華経なり長行の
事とこれをのちにいかなる事とおもひ
とと論ずる事にはいとつれの事にはいかに
とまるべんよりはいかとつれの事にはいかに
とうれども今自殺の身とてをとと
なんとせる事なりはいろ捨身は対はいかにわうて社意
なる事なれども是は大丈夫なるべし出家はとう
なるの代氣象とこそ

驚流の眠り覚えんと云ふ世を厭ひて山に籠
有しの奥にとゝ雲しの程よりうの程の事あり
う後の程云ふ程なくして行ふ者の事を学べ
舞とまひつゞけりの後行りの例
悲雲鶴を金剛集りまを離れ後二者の二
者舞三者化楽四者厳飾楽五者不往浄土
ひり自然いふ者士ゆりとも説法変化の身よ
舞とうづまひ事不律儀なる事さい義
大楽は云ふ流生と者化とうたりて
行人と肝要とこれ律儀なるべき事

なりそ〳〵人はわるとなわるとなるあれ
涅槃経云仏告迦葉菩薩摩訶薩以破戒因緒令人受
持此大乗経典乃至以是因緒堕悪大地獄
巧撞示此耶涅槃又曰護持正法者不受戒不能威儀
しかもなの文に出家の人なるべし出家猶
程云大士所作起出家者化俗とも
ひりやうして法久しわる事

あるべきと雖とも未世の門に法
ゆ〳〵しく〳〵と雖女人の命とえ
ゆ〳〵まで行とくやうれ事にくんや
ゆ〳〵もりまひなる法事を行ふ者を

分を分とおもはざりしかども
彼仏の経の若行を行ひ
ん者ぞ〜若士をもみ
てよ彼者をとめともん
花厳法華流演義抄二十三
ようを第二の雑行若行
とうとき天竺にこれを
仏国論に説き千燒投形飼虎
如是経行若事験初行之旨
其仏文の心法花経の中
にもとれるごとく仏の

ひろめ生ひたる流生とあ
るを腸とそ脳とそ
あるべきとそ
もとよりそしらひ
とい之の薩埵
そ乞食くるをよ
うきみとうびとなる
門を叫とく
有縁生者有死
ひ生ひたる流生とあ
るを腸とそ脳とそ
あるべきとそ
もとよりそしらひ
とい之の薩埵
そ乞食くるをよ
うきみとうびとなる
門を叫とく
有縁生者有死

薩埵太子と申せし時山にあそびて虎のうへつかれたると
みて身をなげてあたへ給ひしこともありきまた雪
山童子といひしときは婆羅門となりて雪山に
おはしき修行しけるに羅刹来りて諸行無
常是生滅法といふことをときて半偈を惜みける
ところに童子のこしくおかせよと羅刹いふ人の血肉を
もとむ是法食をば後半偈をとききかしく生滅
滅已寂滅為楽といへるを聞て此偈を樹石に
みなかきつけて身をなげれはかとてしれそりてやうよ菩薩
行苦行し給へる事は一切衆生をたすけん為也

これと難行苦行しれ身をすてたまふと申之今の自然居士まて身をすつと
むかしのふるきためしもの貧女をたすけんとて華厳経
普賢の行願品におよび梵網経に説りよりては皮をそぎて
紙とし骨を折りて筆とし血を刺て墨として
経典をうつすと事つありとく須弥のたかしとなれのとなん
これ身ととらふふぐく事之鐵や仏ひらし骨とあれは
く経とらいしあるひは向旋あるひは身とまた血を称
しある恭ありとく天竺にては百おなじく今して縁乃
とうく書きすしもちまさんとて拾き法苑珠林二十八
よいけんしく侍るなれ

さて前のごとく百八の名ごとに前の作のごとく
翻訳名義集十八道具篇のごとく梵語なれば
弥塞摩と云阿利吒と云ふ
と翻訳すれば木槵子百八箇
云云
木槵子百八箇
志公称曰
僧伽乃至一子諸乃百八法業獲上果
数珠よりはじまりて百八
煩悩とぐたちなり百八の数珠と通用
とは百八煩悩を尽わたる
名珠とれらこれ

廿乃とてちいさくずつ
数と云てんあく光明
遍廿一遍四十九遍百八遍の数とも
但さなぐるとは乃道今の数珠の
私のうちらく
但云法華とは仏法
と云花の岸とは利
加煩悩為中流最難渡
とも蓮花の仏果
ゆゑ岸とは煩悩の大河

岸ありけり岸より高さ八尺ばかりなる松ありけり
ものとなれば如幽玄なりけり
四囲繁れるうしろに
よ美女とのたまくゆるひれ
う今はいとめにとのぐれくは
堂の檀のうしろにいるを
よりきるる

法華経

法華経

洛東向旭山正立寺偽燈大法師恵空法師偶作

門人筆録之

志賀

一五尺頃桐の木も感無れ絵
仏ふ三十二相あり八十種好
ありて色樂すべき形八十種
天竺大師は法界次第に八十種好の第一ふつ孫の八三義法数に
三十二相の孫は頃肉髻成ることまこと五尺頃おとるふとこの
十種好のうち八は一切仏に云頃上有肉髻赤名二五尺頃
相一切人天二業莫大慈皆ふ能見故せと雖ありおそ仏の

ごとくにつれつるゆゑなるものなり大梵天王は多聞天とい
ひまんがどれ仏乃御身のうけ丈六なる願をたがく御境の更
きうのれどもそれをうくるゆゑなるべし
又願とゝ述べつゝ又懶惰世界の衆生ハ我形と変じてうきこ
百三十万箇に成して稱名乃御願をもんとせゝ法ゝ又形をうくゝ
ゆゑ百四十三万二億箇に成給へる故中くみんるゆゑにてむか
しく還ゝ見けりくのごく不思議後のゆゑにゆゑ人願おとゝ感
とハ感とゝ動とゝ通してうごくとよむと我人とゝそく弥陀ゝ
弥陀ゝ光を見れば奇特のゝゝと泣んとゝふゝとゝを感ずるとを
感ぜしてそれくゝ我と感覚をしめ給ふと通ゝゝたゝ人ハ乃ゝ法
きれが月の新を感し給へ法ゝくゝうゝと感願同文ゝ月後像と

大仏師を弟子しおれるゝ
和光ゝ光ゝ
弥陀ハ元来有光弥ゝ三世の仏ゝ深位の薩埵ゝ
ゝとゝもゝゝゝゝ光ゝゝゝゝゝ弥ゝ乃法
とゝゝゝ現しゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
和光同塵ゝ字ハ光ゝ絶ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

法者抄

洛東向旭山正立寺住大僧都法下恵空述

門人集記之

江口

十二因縁の流れ物ゐ車の庭を巡るがごとく名の林に住ぶ人は
これ人恵心僧都の六道講式に云流れ物ゐ雲霧に車の巡るが
如く名住三林に矣このゆえに十二因縁とはあるひは十二支なども名づ
くるはこれ法門とはいへども法門とはいへども本源とも云へ
欲恵のんをおこすく名恵ちくるりまいれまるひのんとなると
云ひとされば浄心識観法の下巻にのたまくるは青目菩

のひろき腔をゆくゆくおろすぐとゆくゆくうるを法胞と云こ
ニッよ約とゆふ人々お生よの法胞の悪んあ悪よ依てもろくれ悪
業をつくりうるんをゆふしナニれ中ゆ以上ろうをお生れ因とさ
ぐむるしれ法胞行の因よりて流指して又生をうるこ三の識と
ゆるお生ろ法胞と約とのニれ悪因孫よりてい生をうるゆと
紀毋れ脈肉へうぐめて魂のやどりそしるゆを識とゆふしあ若名因
よハ父母交合の時男子は母よ血をおこし女子ハ父よ血を生すれども
くれいとく血ハ入ていまぐ気とゆ〳〵ハさぬ故よ識とゆふとしゆふい
気とゆふは脈肉よ宿りてのちを肉身のうちろわづかれ識
孤一るをゆふしゆふ六入とを脈中よれ四しゆ根のてかりうる孫六

六よ觸とゆふ六ゆ〳〵能生して脈をまれ生ゆうとれ六ゆ根
和ゆふれてをゆうゆふられ因ゆ気身ゆ六変身ゆ六書若ゆわ
ゆ〳〵ゆ身ゆふれゆふ六方法を孫して六藝ゆ射すれども若をゆ
樂をもゆ〳〵清と不清とをもゆ〳〵だ大ゆ生てゆわゆ三ゆ
故ゆ時ゆふれてハひやうゆ故ゆれゆ〳〵ゆ三ゆ色を觸とゆ若
ゆ六〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆれハ法むとゆ分ゆる車のうを来れども
ゆぎゆんとゆゆゆとゆゆ七ゆ気と六ハ三業ゆ〳〵因
ゆれて物を取とゆ〳〵ゆいまぐ色着ゆ〳〵だ尚在ゆ〳〵色ゆ
位張気と云ゆ若ゆハ又六業ゆうゆ十四又業ゆゆるまでのゆと
ゆうれぐ上の第三の識ゆり第七の気までのゆを択法の又果と

云へるにとそ果とハ云ふゆゑハ前生無明行の悪心悪行の因よりて今此身をうけ給ふ故に果とハ云也八つに愛と云ハ三四歳の已後意生長して受たる程の物にふれ愛悪の心生ずるを愛と云而若に八十四五歳より以後財宝をもとめ男女の欲心おこれどもいまださかりならず愛著ざかりなるといふところ九に取と云ハ八九歳の比貪欲も弥つよくなれども此世に死去して来世の位を求ると云ふ而若に其長大にして欲心おこるといふとも十に有と云ハ十四五歳より乃至生涯のはてまで有漏のおもひの妄念妄想をつくりかさね身口意に種々の悪業をなす故に未来の果をもとめやはせまりたくかくるを有といふこれも而若にてみれバ

三つにわけてのちの事なさて右の愛取有の三つをも現在の三因と名づけたり是又来生のたねをまはしへなるゆゑ十一に生といふハ未来の身をうくる事也十二に老死といふハ生をうけて死するにおもむくが故に未来の身も又しかしながら終に死ののぞみありといふ也此ニハ来世にうくべき果とされどもやうに十二因縁ハ三世の因果相続してたがひにやむ事なき也一切衆生はまよひてたへぬ事なりまことにわきまるべき事なるひのおもひより以下のことハ笠置解脱上人の述発心集にもよくわかれ侍る語つゞき前生まで出生かつて生々のさき残れど宿命通をうけたらバ死の生乃事ともあがゞる天台宗に六即とて

つのうをうる中にも名字釈迦陳生昂志そ名字と釈
迦と二級の階級とのがうらハ生をたゞてぬるさるとうてこ
らぬとし
未世をを未世さゝふ世ごの欲をけきまうる事ヲ
死しゝく中有のうらまゝくのられ生ふうん事を祈ぶとい
へど又生後の生をうけぬてハむしの事をいうてまうどさの生
ど胎内の人ハ胎内ふうぶあてうふ胎うと
しられも胎の時陰とて胎欲おぶ事とはうてまうぶたゞ仏ど
う胎ふ入ぶとれも胎をうるとうれもくぶうふまうゝぬ合
しき事ハ浄土要法の法ふもうゝとうゝ

人中天上ハ善果ぶうとうぶ
乃意ふをうぶ
人中とハ又戒の因を法ゆしてて人間ふうまうゝされど又戒の
ものうぶ天生別集ふ人ふの因とそのせられうを人れいさぬ
ゝの事ふ今の世乃又戒をぶてとうふもの我慢偏執し
してつふふ人のうをるものゝこびいふふへハ中ゝ及び
もうれ事ふ又十善をりずれハ天上ふ生後ゝ法ゝられも上に
ふぶゝ十善をうとふんぶべゝうしぶ人中天上を善果とうう
事ふ六ふの中ふも地獄餓鬼畜生へうまうは悪果ふ堕落
人中天上へうまうふ善果ふ又びうの中ふも別ゝて人

中天竺を婆羅と云へ類例とは死後会佛三昧焼ノ席ニ云
ホトケアハム ミユジマウ テン ダウ ニウボウ シウ ガマリ
佛恩況生類例者悲孤無メ面不ルヲ能ハキ一とはう弘決一を見
テン ダウ ミ ザル ニ ノウ ギ
バ類例とは類ハ人のてごさん例はうらゆるれいてごさを見よ
テン ダウ テン ヒト ダウ ケイ ミ ミ
つけるうちを類例と云年竟のんハ衣生のまちひをまづて
テン ダウ ヒツ キマウ ミユジマウ
よき事をばなすことを見ものをつけ事をばみることを事とをわ
ヨ コト ミ ケ ヒ コト ヒ ヒ ヒ
やまりて万ものをうらゆるを海よんはうら事を類例迷惑と云へ
バン モノ ウ ウ ウ ウ テン ダウ メイ ワク ニ
若名同ニ云類例ト云法法ヨ逆恩せ迷惑の字ハ式教例のんがと
ダニ ミマウモノ テン ダウ ヨ ハフ ホウ ヨ メイ ワク ジ コノテン ダウ
かいちまちをしの妄想ものかくいふしをうふんに新ものひぐ
ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ
たる故よ多脱のたりをうへ悪ハ悪悩みんぐまを
ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ
る縄のをとを見るやうのをを脱ハ事獄ものにわひこめれ
ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ

たるんのうぐめてゆるされまれるを見えをかりう三界と事離
ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ
るとをとをれも早竟ハんるるこの世界をまれるを仏果菩提よ
ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ
いうるるれを見ものを法身般若と見ものを脱のを三徳とをひうぐ仏果れをんの
ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ
秘密義を
ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ
はるをいい三途八難の熱苦より離して菩提をいく難を院よ教ものを
ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ
まうぐらとをを
ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ
三途とは火途刀途血途と悪熱水獄ものせたるとをんるを火途ハ地獄道
ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ
とを地獄ものをうるるこをとをうくはは衣生をとを獲湯焼炭とをうをの湯
ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ
にものを炎火ものをうををれをあるものをを
ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ
四苦脱ものを火途とをづものをうをを衣生の悪熱んるをを
ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ ヒ

蓮とぐさしものかの法よりうまれ出て此のむくひとく
とくとく刀途八鐵囲道とそ魔のくるゝとくはゝ出生者ふ
刀杖路逼とそ刀や杖よりおこりて生てさぐゝのくけん
ふわうこの故ふ地獄脱殺ふ八鐵鬼道を刀途といひたゞ刀途
しに実説もはり童子義の実血刀杖者とゝはふもろんを
見法へしられば実八元生のんん懶貪ふくゝめをぐむんる死ば
同とゝる事と血途とハ畜生道とをふる者とゝはゝ元生はつよ
さるのハよきを仰したゞびふる者噉とて血とのゝ肉と食とる故よ
地獄脱殺ふ八血途とあづゝあれいまゝ元生悪魔ふくりふまま
海よりとゝはゝ元しゝとゝもゝまゝ途と貪嗜魔の之

毒ふ射ふ法説はり慈雲撮生ノ金剛集ふ之ハ途一類ニ不殺
地獄生ふ元ハ之ハ途ハ編歴とゝはり之又八雑とハ八ケふれ落雑はる
不ゝ一如法師ノ雑ニ云ハ之八魔感報者樂有実面皆本地ノ佛
不ゝ正法ノ加ニ縛ニ和ニ為雑ト也八雑不の事雑唐法所説殺ふ
はり之ふ在地獄ニ雑ゝ地獄とハ八面膜部閻の下ふ百由旬と
ゝて八ゝ八熱等の獄はり之ふ地獄と名づゝ元生悪業ふ
感ずるふゝゝてのふふ造生ゝてゝるゝふひまりゝ切ふ見
仏ゝ法ゝ法ゝ海ゝたゞる事ゝ加ふ雑とするゝ二ふ八生畜生雑ゝ畜
生ゝ者ゝ種類ふくはり之ふ因業ふはりてをむくひとゝけゝふ

やまひをなほすなり海苔をもつて敷く敷物とす

ひろうれんげびやうめとあひのこあひのこ苦しくけそれ苦

見佛因法とは佛法なり難しとは難しとは餓鬼難しとは餓鬼

種々の苦しみ五蘊盛陰苦

やまひ鬼魅もろもろの飢渇のうるおひ

りとは難しとは法華経難しとは天竺

知とは人のうらんすがりうらみ怨嗟

人身のうるおひうるおひなりのものひとしなり

もし見佛聞法とは難しとは

復深沈沉のうらふのおもしひとしなり

の業にして中夫

中世しのふ事もなりけれ

育聾瘖瘂難しとは

ひみくしひのりのなびにおりう

ふ生れる新しい世でく法相不具のやうとされ

いたとひ中世に生れとくに生

人ども見佛聞法なりもろこしに難しとするこの世

智辯聰の難し世間の人邪智

の邪出とうひふりてやの正法を伝ずにすがら難し

ひとは生生仏法に難しもれ佛のおやせ

うけ或はそれて生ぶるの御生世の御法あくざるれ仏

女法をビれ又業提の障りとなる故に雖ども苦患に
さそられてとゝに途八難のうちにわひられ〳〵よさそられて仏法流
りのけとあり是ぬるとゝろ〳〵おの〳〵ぶんぶ〳〵ゑ又義
心のうぐらと考ふと思ふ人〳〵是業提心とおもす事を
ゆるゝとゝをとたんもおこ〳〵されハ流りのたりもうこせるぐら
とゝ媒の字なり礼記曲礼ゝ男女非レ有レ別ニ形疎不レ親ニ
りて夫婦の縁とるゝんとすゆとゝ礼のつゝしとるんものとるぐらと
云しひんられハ義心のたりもるゝ事とるぐらと〳〵
いる事なり

御るゝ縁〳〵たまゝ〳〵女うゝ礼人男と女生うとゝ人ゝ魔業深

さ身と生れ
罪二業報ニ云人雖レ恐レ ゆゝる人雖レ流ニ ゆゝる人去女即男
雖レ ゆ雖女の心を是より礼生〳〵せ〳〵ふ三途八難の中ふ墮
生て苦患ふあゝる事なるふいまを思ひとれまてたまゝ
人間ふうゝびわゝるふ人ゝ又魔業ふゝ女人の身と生うとゝ
人身ゝけゝ礼事を雖ふたゝとうてゝ〳〵ものゝとハ孝知
婆小町よくゝ〳〵もゝ礼ゝて女人の魔業深ゝ事ハ又障三途ゝの
況ゝうゝをゝゝふ障の事ハ新て礼事ゝるゝん三途の事ハ仏傷ふ
適ゝゝゆ法するゝゝ女人ゝ雖ゝてハ女ふ法ひ成人ゝてハ女ゝ
況ひをゝてゝふゝの法ふとゝ云事と三法とゝふゝ大海九十九里ふ海

源氏ゝゝバカ三ノ巻二　女ハ三ツノ障タガフ

是に於て小野郎 [illegible] 第八巻に曰はく女人は十悪の事と云ふて
下は禽獣父母不孝と云ふ [illegible] 恭敬視念滋味と云ふと云
おもふに女人は [illegible] 何ぞ [illegible] 食とくらせて [illegible] 男子を [illegible] 産む
と云ふ [illegible] 嫁と云ふ [illegible] 他家より [illegible] 嫁すると云ふ [illegible] 生ずと
云ふ [illegible] 雖基難と [illegible] 道に [illegible] 親の [illegible] 中為文婿禁制と云ふ

あり [illegible] 制乃至 [illegible] 自由 [illegible] 為昭 [illegible] 所
為と云ふて八孫児の [illegible] 為 [illegible] 中 [illegible] 三
種は [illegible] 三従 [illegible] 第七自樂 [illegible] 為人生 [illegible] 婦人の身 [illegible] 等
菩樂依他人と云ふ [illegible] 是れ [illegible] 温 [illegible] 況男子 [illegible] 仏
性と云ふ事 [illegible] 法 [illegible] 女 [illegible] 女 [illegible] 仏
一つの [illegible] 成仏 [illegible] 女人 [illegible] 生の [illegible] 又 [illegible] 言と
云ふ [illegible] 女人 [illegible] 法文 [illegible] 女人の
身なる人 [illegible] 念仏して [illegible] 竹の流 [illegible] 乃女と云ふ [illegible] 乳 [illegible] の世 [illegible]
おとしたり [illegible] 乳 [illegible] 竹の流 [illegible] 乃女と云ふ乳 [illegible] の世 [illegible]
まで [illegible] 為 [illegible] 悲 [illegible]

皮のある竹とある色の竹とをいへり流れの女ハ遊女とかける也ただに女人ハ
罪障ふかきものなるを况又遊女と生れし事ハいかばかりつミふ
かきこと三蔵法数二十二に[illegible]によりて云[illegible]トハ志
[illegible]不潔[illegible]不正[illegible]因縁隠[illegible]法比丘[illegible]
[illegible]とあり法花[illegible]すも[illegible]肉ヲ自活[illegible]女ヲ
如是之人皆勿親近スルと見えたり
ある時ハ色にそミ貪著の[illegible]又ある時ハ[illegible]
執のふかくさき心によりて[illegible]の縁となる也と[illegible]や皆[illegible]
六塵の境に迷ひ六根の罪をつくる事も見えてあるをかくて迷
ふなるべし

法花懺法ニ云衆生無量世ヨリ来眼根因縁ニ貪著ス諸ノ色ヲ[illegible]
故ニ貪愛ス諸塵ニ云く衆生従無数劫来タ耳根ノ因縁随逐シ外[illegible]
音時心ニ生ス惑著ヲ云く以舌根起ス悪口罪ヲ妄言綺語悪口両舌云
隨テ所縁スル境ニ起ス貪瞋癡ヲ云く意識[illegible]因果ニ六[illegible]ハ由テ妄
起心ハ逐テ境ニ流レ貪著スル所ノ[illegible]ニ如シ膠ノ[illegible]葉ニ[illegible]と見えたりこれらの文
のぶるにハ十八界のうちを[illegible]と見ハすこし[illegible]事に
十八界とハ六根六識六境なり先はじめの六根とハ眼耳鼻舌
身意なり是一切の罪業の根源となるもの也これなるが故に
六根といふされどもこれなるを[illegible]
時ハつミもさりりも[illegible]事なれども六境にむかふと見て六識が

さしかてまよひの蘊を生ずる事を六境とハ色聲香味觸法なり
境と云ハ六つをもむかふの六根に對するわれをと云て又是を六塵と云
いふ也六識とハ六の六根と云ふ境とむかひあふと見聞覺知のさしおこる
たましゐと云也されバ眼にて色を見て欲をおこし耳にて聲を
きゝて愛著し鼻にハ香をかぎて心をまよハし舌にて一切
の諸の味をなめて煩惱を起し身にてハすゞしき事をなす
身あたゝかる肌にふれて著をなし心にてハ法を分別して
ましひと成此十八界が輪廻生死の流轉の根元也天台大師の法界
次第にくりかへしくの色にへりおるに今眼耳鼻舌身意の六根
色聲香味觸法と觀ずると見八十八界の

さかくさやうなれども其一念のうちに雪の日にあわのきゆるごとく
かたびゆくを時むかしの六根の相手となりし六境もたち
まち轉じかはりて我一念の智恵の名となりしが時
を殺方ともにうまれあひてされバこそ圓融無碍をすると境智冥合と云
中々事にて此縁の辭にハ色に染とハ女色なずむの愛著にて
有る夫を此にハ耳にも思ふとの聲をきゝて愛執の心いと
ふかきとハ愛著執心いよ〳〵深しとも云ひ口よりハ妄染の縁
しるゝとハ身口意の三業みな妄想顛倒の因縁となりて妄
染を妄言と申すなり此より妄染とかはるが善本なるべし
言の字のひゞきにあらふ教をりまぎれざるらん夜もすがりの

事ハ相ずこてゝ
ぶりにそまはとこゝに染ハ水
ハ六藝の法よりまゝ六根の罪とつくるとゝ
藝も六塵も名月ハ四ゝく変番味解法るれとも六塵とゝ
まゞ妄染のこゝハ入てぬと六藝とゝるハやそゝの六ケ所みなけ
ぐるこゝたる名ゝ名よりまゝひとゝ字とつくゝ法ハそれよりもんゝ
六根ハ名ゝ小ゝりてきとつゝとつゝりかゝ入ゝる名ゝ六根のつゝ
とつくゝと決定せるゝ
実相玄漏の大海より藝六欲の風をふり和ども隨縁ゝゝの波の
ゝくゝ月もかゝ

実相とは法花方便品ゝ法法実相と云りゝ釈ゝ四教ゝ
実相ヲ一と称しまり実相とハ万法ゝ是ゝ真の実の相體
とゝんゝゝゝの理ハ昔ゝも悪ゝもゝのゝ法ゝ玄漏とゝ也
漏とハ煩悩の名ゝ法も文句紀ゝ欲漏ゝ玄漏ゝ
てゝり一ゝ玄漏ハ失ゝ也為ゝ煩業ゝ為法漏ゝ因ゝとゝり漏の
字ハ和刊ゝ流ゝとゝまゝてゝ為ゝ者ゝ為ゝりゝれゝするんゝまゝ
ひの名ゝゝらゝばゝてゝゝんゝ漏とゝゝ事ゝ実相とさ
してゝ玄漏とゝゝハゝくゝきゝとゝる事ゝ実相玄漏の南無が
不変真ゝゝゝる為ゝ大海ゝたゝゝ波のゝゝわゝるゝを隨
緣真ゝゝとゝゝ楞伽経ゝゝ法界流ゝ風動心海識波

不改とうさまのひ家御ぬ犯の法毒するも心為に不藝の所に新ぬ風吹海
法徴流生すとゆうう又藝六欲の風もみかか法界の身ふそ
云滴の大海ふもと風いふぬとし又藝と六藝の中れ法藝
とのまて餘のみつも六藝とは六根ふおるふの欲心をとそと
陸張表紙の波とふ右し不慶まぬの理體のうへ世る弘釜れ張
よしれて教法ふの心地と隨張とふ右し彩古今弘法大師の家
土依法密戸れ場みてまる法性のむろとゝとどとうすひなる
の波風とをぬ月ぐる孔孫の辭ひ奇のひぐとふとくぬろ宝海
の彩状の犯すもひ奇とのをとうう明号為ノ性智ノ法張とハ右
特ノ不慶ニ従ノ不慶ハ法ナ中ノ理本有不改し義ノ陸張乃

金事ヲ將慶遊仏ノ義も一ぬ沖ニ元表ぬ仏性ノ法ノ生滅法ノ風ノ
業初ニ起ス一切相ぬ沖ぬ周風ニ妄波恩ニ初ニ表ぬ風心息スレハ初お元
表ニ故ニ名隨張表ぬト とゆうあれとの様の生も孔表ぬの者
水ふ表とうり生死の波ハるけ生ぬ風の張ふ陸とふの波万
波とたつぞとのんとのぐ生ぬうりぬ表ふ陸張表ぬ波
またふる故ふ今孫ふる又波のたぬ月もるゆ とハゆうう
仮ふるやどにめらとしるゆへ
戸迦羅越六方礼張ニ云又毎素ぬ表ぬ者ノ表ハ表ぬ表ぬ
妻男ヲ天的ハ若清教ス この張文のんも
ふとあすハ浮世もわるぐ

万法然んのさとりは不変真如の位より成ると云ふ時は
浮世の高砂の白髪染めより
黄泉の薬と云ふ歌は白髪とりて老ひたる
白雲よりも染てあの色よりも
江口の御遊女はまことの女性と云ふ
江口の河遊遊を
ゆえ御解を知り黄泉の薬と云ふ歌
白髪となりしとも
年ある人はやうは作りもをるべしとの繁抜山よ
ゆつ法志と云ふ人は法花経を十二ながの山中ふ入りて
彌じ入りしと云ふ人の女性まわり身に紙服をい

ろとりし衣裳を着て書作まそ入ふる筆を手にとりて
中ふ一丈の白き幕と大幕とを張りくゆつのもとよ来りて云
まれ出入る微をとりしよ白れたをうふ
乃湯よみらそんとするよ食とはやめんと稀ぶく八一歩
の宿をとんと云ふつくてんづ
時ふ女りるるげくやまど偽を出んとうて茶の湯
をとりて出てそとのわしむ
さけびもしく云儀よ股中ふ
我股と按摩しふ人と人偽も不役よ人揚枝と布ふて
ちちろろうろうと人をりを股のいむふと按摩

秋と雖もすゝきのけぶりふかなり成て天王寺の女堂の前の
はたらまち祥雲とそゝりのぼり奇瑞の雲と変じ数と見て
しるしの白象と化し蘇八二年の蓮花と成りて庭先に
ぐりて開くまむひて云れいく迦葉菩薩なりなんぢが
過去とゝろんためなり迦葉来れりひさうぢして我れ
中に入給へ〳〵なんぢ心中に仏性あり中の月のおくけ
れるそむくべしとゝのまうくいるうちまゝ上うち花ちり
裏をしかるに人こゝとゝ見て皆して称歎せぬもの〻なし目を
出のあを守護顕とゝひ〳〵人ゝ皆〻たゞ多くおそれひるとゝんぢは
あ乃ち祥雲なりて光我庭をしかるに皆〻ふ祥雲を金ふ

縁仏の教ゆりしと蕃喫のうちなる事とあり如遊ふ
のたゝ事網延ふくれるくみてのりして法花寺と建立し
ゝう今の天衣なりけ偽かりて坂を四をるをみそなりて
山中ふとゞあらとゝうけ半仏泥統能ゝ五七および法も
是験偽なりゝ今れ寺法恵一人の偽る極女あひて生死のもち
るゝ事とうゝひ陸奥ふのけりあとゝひで蕃喫と女堂ろ
と云へ八れちまち蕃喫菩薩のお解脱けりて白象の白象と
ゝりしは永ゝひく祥雲なりて光ゝけりしとはゝれ
白雲とゝうる色沼年ふくゝのたゝふれ遊ゝる事ゝり蕃喫の
白象ゝゝりて来りゝふ法花ゝも六年白象ゝ化ゝ八

眼前ゆゑ仏教の学しゆる事を法分会義の儀と為すとこそ
思のそこゝゝゆきゆゑ仏極楽に往生五の蓮華のうち小蓮華の
まれ和尚浄土へ入りゆゑ小のんるべし花厳経の善賢行願の書
ゲンボ サツ
蓮華蔵の十大願王おこし浄土へ廻向をゝし十二光九願ゆゑ
極楽に往生とそつゆゑ往生ゆつきしたがんゆゑ願は今の
極女しゆゑ願して往生のまゝひとさとせるも極楽往生のくらゝく
ゆひろまく

春日詣神
見い梅尾の明恵法師めくい我入唐渡天の志に
ゆゑ梅尾に住ゆゑ明恵法師ゆゑ
峰今南部して下向仕ひ
明恵法師の事い元亨釈書に姓平氏紀州在田郡人
父重忠ゆゑ釈ゆゑ唐渡天の志のゆゑ事ゆゑ
ゆゑ建仁寺に学ゆゑ入唐して渡天
と称ゆゑ唐土へ天竺に行のさ
ゆゑ乱逆の後ゆゑ関東へ梅尾へ帰
ゆゑ唐土へ入唐ゆゑ

めぐり給ひし後天武天皇むかしの
ゆめ和解元亨釋書に二の巻に載せ
神社考云ふ中に云明恵敬信天皇神
託而留之とあり道喜も物語とやう
なれまぐさくなり信と信撥とやうや
光る物屋の明恵上人あくかたうや嵯峨の
御さとて神宮に婦女と宿り
宿中事余の俗よりあくびに我入夜渡天れ志ゆにより
れ服元の為に嵯峨に帰りて其の光を仰ぎ
ぐ上人れ小事い年始
ひとうれ建築とぐ物
上人と云ふ事と名付竺羅の紀伝上人と云ふ
れ云ふ事の服手のごとくにて奮起各系れ擁
獲なりとして取りてひりよ
神社考曰吉日大明神託宣曰明恵房紀脱房紀云
次第也或時ひ人宿春日社廟折膝而伏ありて紀伝
上人れ事い稱云竺羅云ふ偽云解負芸義浄平
之孫也云ふ延貞憲之子也云ふれと解脱の吉日
社系の時廉れ有と云ふ
えうり文元亨上皇撫拍の拍とものこりよ

はなはだ麁と射のひしゃ
と懺悔し侍りけるに
根況やこゝろのしるしよ
夢に僧ともつゝに
鞭ゝやび屋うかさとう
ざりて法のむしろもそれやらなりしゆし
くも鹿野苑の事とも入くまれるなどに君
臣上下ゝれ感歎よ及ばれしとうく神社考
光しうく神社考はあるを熊野
開基よ殺生の罪わり
自性神と初語とき
的神あるを紀伝ゝ上人の親はり
て先ものにおるゝ対神の奇ゝ
吉野の下に地獄ゝ
飛おりとゝ
もむりゝ毎物茅ゝ
ゝ一滴と吉月ゝの獄
て若悪ゝとゝ
日本と去入唐渡天ゝ
ゝ少ゝ生ゝ
ゝ入唐渡天ゝ

神亀元年甲子

佛法東漸時法師生年百歳
あつまひの者神変と
滅後の八塔をたてあ
うんとの称ひと
それ三無法師三
のきわとこれうつ
とも法師ともなづ
よ威徳と
域記唐南山律
乞又伯元えしわの小仏生年の時分はて
の益ともなるべ
あとひ天竺へ
をれむりにこれ
利益とわまで
れ事へ今ハ
となり長月山
わうとうとうとうとう
中天竺記曰毒毒北方三国第中別毒数十毒毒
総名曰毒毒仏道所興
の益ともなるべ
あとひ天竺へ
をれむりにこれ
利益とわまで
れ事へ今ハ
となり長月山

れ光輝を和光にくもらせまた衣をり是摩訶の
事を意平生注をり
吉日山野を尋ねる所鹿を追ひ出
し勝と形角とを付け上人と礼拝をなされ
特とうんぬんをうと海の浄土をいはんずると同じむさ
ぼりをそして衣を嗜めもとく我れも神の
まのあくとぐまりを神意にあわせおくりませ
明恵高弘の夢伝の社参の時鹿の掟とをり
事いとに注をむとして殺生をいつ和尚は殺生の
ちにわりと云伝わりそれ
ゆくいふなるべしまよ

ゆくとい神のたれまとといふ事
紀ちて入唐渡天といひて仏法流布の名義とり
古跡と為んぬ為ぐうて天竺山と称むべくい比叡山
は釋書日藏傳曰我是牟尼應化藏主
菩薩也此處ヲ曰ニ金峯山浄土ニ
を意べしまた吉野の
おとこい入唐ととぐうて天竺山いりつて
台州府りわつ山く上台星を庵で言さ一第八
千丈周を八百里ありとく廣輿記十一巻よりとり
とおりち天竺天師攝摩入宮の和之を天竺山
とといふをあるを和尚を模をく

天王寺の名をとるべし故あるよしを御夢
のたまひ集給ふ人々うつ三才圖會に云天台
山の天台嶺の西一百一十里なり東海記に云
天台山の八室あり云これを八室ひとりのぼる
とうやはなれむかいうんとも仏教大師ひとと
うつしめるなり所の巖のまはれい天台山にのぞ
つもつて同じ理なり吳越の天台山と称ス
はひとりくれはうの事及ひ天台大師滅後二百
餘年ハ我朝ハ乘生して仏教大師とあらはれ
出給ふ年ハ慈覺大師入唐求法の年に
相符ス言

稚日女尊一最澄傳ハ
小窓別記四巻云文殊通濟云
山形ハ時和尚以為文殊示現之靈華嚴流清涼
ハ代別屋門ハ菩山也云吉野葉波
吉野ハ花也ゆゑ
海の神祇に乘て云曰
ゆゑなるべし
神祇拾遺日明神影向時以榊為鞭駕鹿来臨
三笠山也其所經歷号謂鹿道案今名六道
辻ト如何
昔ハ雲雷山今ハ京生と度をんとして大明神と示現
ひとりよ長しゆへ
れとおむべし

されバ渡天とげ給ひしおほむかし霊鷲山にて釈尊
説法の会にくはゝりし八幡平日法も神社彦石
清水八幡宮の託宣とのたまふ者には此首楞厳山
説法花令に来王宮中赤現大明神とあらはれ託宣残
給ひし事にいとひさしくなりぬ
我も亦釈迦牟尼仏世に出させ給ひし月の
世に照し給ひし御神託をあらたなりけれは松尾や
菩提の樂のさは神法の迷ふを照さを晴れなしや
春日大明神と菩提の法もけ大菩薩と云はるゝとも
本地は釈迦にして菩提も一は流転の苦をぬき

樂をあたへんとおぼしめしいつくしみといふ菩提も
とゝのひ度衆生とて布施の行ふを持戒の行ふを
忍辱の行ふを精進にも智恵ふをいづれ
も菩提の行ふおこなひたまひしあかつき菩薩の済度
の流れをつぎ給ひ春日大明神本地大菩薩の法をそ
旧教に仏理よくしりたまひおほくのものやまひとり
さくふうき月ゆくべきもの
小機の流生の益なれと妙ひにかたしけなき瓔珞細摂
の衣を脱棄の散衣と着して空論の流法を
説の給ひし鹿野苑も寂なれや春日野によ遊び

ゐ鹿の堂なりしとぞ
ひ仏の恵ゐ春日明神ゐ釋迦牟尼仏めくみ
しまして春日明神鹿の堂に仏の御事いとの
釋迦牟尼といく小柴の樹のたきゐ仏と渉信
をんゐに鹿野苑とゐ
おもむく小柴四河合流とゐ仏の御恵とお
らしを四諦五大流四春日明神鹿苑釋迦牟尼
鹿ゐ仏ゐ日吉山王大を釋迦如来放以
えゐゐ釋迦最初成道のゐ仏ゐ花厳
経とゐ仏ゐ仏ゐ明神中ゐ仏ゐ菩薩のたく

ひのごとを仏大乗法門と言ひしとも仏史わ柴の
樹おゐ仏ゐ道のなしゐ如唖
とくゐゐひゐゐものゐ仏とゐけざゐとく
にごりゐゐめゐ花とゐいとざゐごとに文ゐ
まゐをゐゐしゐ平徐ゐの平とたちゐんとゐれ
ちゐづくにあげちゐとく鹿野苑とゐ平ゐゐ
ゐれわを河仏又の長ゐんゐゐて仏世ゐ幸懐ゐな
く流生ゐさゐゐ河芸もあゐまで仏文ゐゐゐひ
ゐひ今まゐゐ仏勇果厳の言容とゐざゐて文柴
ゐ蓮花ゐ堂していゐふを家ゐなゐ海ゐあゐて

花叢法界無礙の力程とくりくるひのもと
るをもつくしてまことに丈夫男といふべき海
しき衆僧のうらとなりてやまづれる衣とり
ちくうれたりの花はおのむきいうふもわるくしき
小衆の法門とうるのひくまつるべる我子小樹の流生
とり等しのみこをもるうち毒日の神は花そ
おりまして花はしんとしのみとこの法花云脱
瑞籠細撰上服文之廉撃姫賦之衣文向六之一云脱如
服及意形光量功德四十九戒定恵像差居瑞籠叙
滅恵細撰上服大小衆和海者籠之具容服為盛子剃髪

髪二衆不宜見是和好色加脱ちく文之廉撃姫賦丈六形
色廉生母法母色撃也面石名同云あの花者強時新沢形
身形土和加錦之色瑞籠細撰衣今数廉野苑小樹時脱瑞
籠細撰衣成丈六形之小身之廉撃姫賦衣況小衆法之
法門也色別四河合強也像ものを法度ぶ小樹の流生
ものをなるとい花叢ようくり利益をうるこ流生とうも
ひ瑞籠細撰とい瑞籠というかも結海ようぶりうる
ぶきくやうるう衣形あして花叢の時入数来
なりでうく廉撃ものを散衣とへあくまくやとうる
散漫の衣あれとまるとう河合四海ものを法門とあ

しのぶるうらく涅槃と云者苦集滅道の四種苦諦と云
ひ身に苦果を修身なるゆゑ色香味触業煩悩の事よ
りて今生じてうしなひ苦とうろ事とまろこ
集諦と業煩悩と流生死苦果とを称さあつろ
ものの煩悩ごとまろこあるを世間の事果く
滅諦と云煩悩と滅して無為涅槃の果と知ろ也
これより生死さとりて道諦と云飛宝遊苦四種
の法門とまろびて涅槃を悟ろ道と名
づくこれ四諦の法門と云諦の字とくるは事の
諦ノ字訓審実不虚実也諦ノ字訓審実也仏法と

まろびて苦集滅道のことりとこれ実ごとくなるゆ
ゑろゆゑなるく諦の字とくるとなんはく
鹿野苑と云若苦集七者よのと波羅痴斯国
と云ろ波羅奈と云ろ波羅奈ろ云れども遠
仙なりとや中度の姪よりとなん波羅奈
なる云河ゆり波羅奈と云ろ
うしろくまと云ろ法花経妙
と翻訳しまろ鹿苑ともいふ法花経妙
十八者よのをなるよの波羅奈を中度ろ
して屋ろくこと云ゆり波羅痴河ゆりは河の東ゆ

十餘里とぞ聞く鹿野といふ所に大なる樹のありけ
がそこに佛あらはれ給ひ鹿野苑とぞ
昔波羅奈國有二鹿王一身七宝色是釈迦菩薩上人見集解上
てたちまち鹿野みがりにいらせ給ひ
あれはいく鹿野苑とやいふらん
釈書曰鹿是轉法輪菩薩之三摩耶又春日大神之使獣也
法花の説と美祝なる事は考へ見るやうにも
和新に成るとやうに鹿野苑とやいふ
それはまことに丹後守敬廣の新に言ふと
ありけるとぞ鹿のうせにけるとぞいふ

くくりつけ給へる紀氏の
法花経御製はひ給へとあるとうかがひ
ゆ給ひ給へるなるあの大寺月をみ
ものも八重桜の都とて春日殿のそのど
うけ給
あの大寺東大寺奥福元興寺大安寺薬師寺法隆寺と
七大寺とぞいふ
百寺は法と
実は羅漢とぞ神祇とぞ宮うく

此度の入庵とハむかしと定むべし傳くる者ハいたゞ人ぞ
祝ひとなのりける庵し入庵にて浄天となりまうしける
三笠の山も天竺となつし摩耶の誕生伽耶の
宋名鷲峯の説法娑羅林の入滅とひとしく冬を
まなべし皆あつに稚の人と本縁で年の神の告我ハ
時風秀平もかうとて見るとやうに生まり
又天竺とハ天竺一国とも又は多々時東西南北
則是天竺と加へる天竺とハ云之摩耶の誕
生より娑羅林の入滅までハ釈尊の八相の中乃四
相とありてのこりの四相もそうらにとあらん

なるべし八相の外くに蟻通に道とこれらみな垣
れぞ此釈尊の八相の外にありさ海ともあらてゐなずらぐ、おぼま
むげしとそ此相と現じう事と摩耶の誕生とハ是ハ
摩耶ハ摩訶摩耶夫人なり名義集と云ハ摩訶
摩耶ハ大幻化とよびく摩耶ハ大術といひあつかひハ
大幻とハ子細花厳経よりとくの人をとして大術
知幻法門といふ事とありて善財にハ如来の母とあそびの人
在く釈迦の仏の一代をとかせ給ふ此夫人御姿の妙なる
え為して生くまれつき温和なるのこゝろもと正直
なることも玉女のごとく蓮は をとゞまり給ふ

金剛のごとくなりしゆゑ新たに生まれ百世以上の菩薩
はあるべからざるなり人とうまれ仏性明らかなるゆゑ
人とうまれひのひく境界をもつて生を脱よ
やどり給まへるのひくをもつて誕生の時の相なり
ひくを摩拾羅上人にたとへ次に仏耶の
生をたとへ仏耶は梵語にて唐土にいふ山嵩といふなり
じくうを城あるゆゑとうやあ城にはんしうの仏耶
城より二千里とうとうして妙覚の山の頂と一里と
もうるゆゑ妙法蓮華経の五字をいふ二月八日明星出の時初記
とうとうゆゑ仏耶城とつくり仏は

成仏とはいはゆる雖説法華転法輪
山の事へ義平より源もとゆゑに略して記をば
妙法蓮華経の五字に切くはしくは法華経の五字世に流
通とは教主釈尊及び妙法蓮華経
をみな此山のうへにて雖説法華経
いはゆる事なるゆゑに高野大師は秘経の秘蹟なるゆゑ
仏法の義をもつて雖説法華経の道とはいふ事
なるゆゑに先をもつて出して雖説法華経といふ記い
ぬるゆゑに法花経の事をもつてとはいふ
なるゆゑにわげくは一代諸法華経の義なるゆゑ

入滅とかきたる沙羅林の入滅とは生滅変滅なり沙羅樹
双樹なり娑羅入滅とは仏の二月十五日涅槃の
時は拘尸那城跋提河の辺にして寂滅として入滅し
給ふ時は床の四方にあり〳〵樹と娑羅双樹
とやきたるが異〳〵にて双林とも双樹とも
入木にてはなれ松柏などのごとく常住不変
を娑羅と云ふ也いまの世まで木なりとやらん
沙羅木といふ木なれば娑羅とおもひ
沙羅園と翻じ来たれども海源師のき
教授の説とかんれば沙羅樹方のあ

わひ〳〵ふりかたく根しかうみわたくあいふ
業〳〵一本ならずとて枯れ東西南北の四方より
とのこ〳〵二なかつらなり屋ろ事あるべきの
ようたがひよ礼儀などは紙をやうにゆづりわ
くかんゆる事りのようなぞ紙をやうにゆづりわ
理の枝ふるくかれ庵主などにわる連
業よ例く業は大なる事瓶のごとくなるあ
事いくる業のごとくとうや沙をりかれよこと
つくらるべふ木なれて双林とかゆくて木漆
ぼ木の枝の若くゆよぼとなる事といふ時風

秀行とは号清水寺の毒日大明神大和の新宮の時
仏を中にして百人の名
神祇まさしくあらたなる色れうらう光さう毒日
如来と重々の世界とぬきて菩提を求し仏神と
なるべきなり
浄名経の中に全利弗の色ようく物をる花い
世界は元来不浄の土なれども前様のたぐ
ひ目あはなきれく仏境界よりもとこうら
ぐる事をづくやまざらんれい指言やそそれ
まづとも彼をんとやおぼ久の指ようく大比
と按ずるにうべたちまち此世界七宝荘厳清浄
土と変ずるうりろとをんを今も又ようり毒日明
神のおん化身也来あるてをしたるなぐ仏法と
弾ちをしめんあらとくうも弟子ぐて明
恵上人よりんをもつ事をもつ
時は大地震動もろは下界の神祇の系舎うもとは八
大龍王雨降龍王海安仏菩薩和修
吉龍王法華龍王阿那婆達多龍王百々養
引つ恵平地は波深とあて仏の会座より出来
しる御法と龍女もろ和妙法華経也

指法菩提薩埵樂乾闥婆王婆羅門阿修羅
王羅睺阿修羅王火迦陵の眷屬うつゝ
座列ありし

法花経第一序品に云有八部龍王難陀跋難陀娑
伽羅龍王和脩吉龍王德叉迦龍王阿那婆達多龍
王摩那斯龍王優鉢羅龍王等各与千百子眷屬俱
又法華経菩提樹下大法螺吹法鼓擊大法雨
菩提樹下法螺吹菩提樹下
指法菩提樹下各与千百子眷屬俱乾闥婆王
樂乾闥婆王樂音乾闥婆王乾闥婆王
各与千百子眷屬俱阿修羅王阿那婆達多
龍王阿那婆達多龍王阿那婆達多龍王
難陀跋難陀龍王阿那婆達多龍王
各与千百子眷屬俱とあり
法とつゝりあくくうなるべ難陀跋難陀とは
難陀とは歌詠と跋難陀とは歌詠と
訳は完全なる二龍なり
くて無限なるおゆるさるふ飢渴なる民乃
乾闥婆とは名よつあくく歌詠といふ婆伽羅龍
王とは鹿じて鹹海とはれりと海の名なり海龍
中に住とは居とは所名とは和脩吉龍王と
名多とは海とは海のおとゝとは名なり

法又如毒蛇とは此は視毒と多毒とも譬と阿那婆
婆達多とは五逆罪の様悪の所りに入る阿那婆
達多と阿耨達とは二つ共翻じて無熱池の龍王
池の事は池の龍と云へば池
波羅とは二つ共に日は現じて
のどかなることあるべきうつくしき
梁塵秘抄に天竺の法華経の法
どり人は池に充ての南あり加人は池に
樂乾闥婆海王樂音乾闥婆海王とは
五逆罪を犯したる者は
とは

とも見たりとも聞とも聞いたる事は仏法の神あり婆
羅門の婆羅門とは此は被羅とは
とは
これは天竺にあるべきうつくしき龍
此は海龍とは日月のさうりとは
日月とは二つ共に日を龍とる事
雖高いまだ生死のはざる
と名つけたる龍の名と付たる
人とは此は海龍の名と付たる
とは

中より 久修羅の日月と慶藏とうたがひたるぞくらく
いへる事とかく修羅ハ字の義ハ清濁によりて恒
河の春屋とハおほき事と云恒河とハ何のいさごに
あらぬ義之佛の御弟子ハ恒河とハ九河あれハ此須
にれなく好むれ旨護に数のおほき事にあらへ
まの舎衛国ハ獄卒にあらはめていさごれらハ九
事題のさらしこゝろや今億々もと道とうらくちをき
るかにハ之坐刹とい龍神五一面に座しなりあざむくへ
龍女がさまに波深の袖白おなれや和田氏家の掛なる
白妙の緑の空色とうつろうさまや沖行かぐら月

れなるの藤の川づらにうびかれてハ大龍王ゆうやう
の冠をとゝのへ下ハ基白世れ月の云ふるれをよのかぐら
鳶の羽とると出てかんとや
龍王舞ならふハ波の袖とふ之龍女とハ法花の提
婆品ハよヲれ娑伽羅龍王のむすめ八歳にて法
花の会座へうゝひ出てく宝珠を佛にまいらせてそく
身成仏となりて無垢世界ハ南方無垢とふ之和田
川とハ基白にかうれ名所之鳶大ハ世守ハ古今より
基白社とヲでひれ世守出てかんふ今いくかありて若菜
つみてん旧都よ鋒葉摘とらしく云基白野ハ鳶かぞ

いふ事あり撓立てまとめるなりとさいふを野銭まうり
人と野守といひ世ゝありて今に此ところに来りしもんよ今いくら
あるくらふの葉つむりどふかなるうかれとともに唐の蝉
火のごとく日本の飛火と伊弥のとぶひがくまがきを
つりとんだつまこへ浅路徳寿のよふなりとてうつなり
う秋銭雨ありよりんしく奈良の郡よる事ありと
あるくのそれろ鍛冶のわかふ蝉燧春日の飛火の世
よう史ぞんころそむろへ
摩耶の池生鉄仏等の説法転妹の入滅とどくと
おらりて先上ぬや明恵上人法宣度へと手をあげて

波天と云ものはまろうまし法仏路を鶏のまでやうる
ろくもし此上あらしれもろに楽しく龍女の南方よ
飛去もり去錫杖の猿沢の池の青浪をそげさ
てよ子鶏の千人の大蛇となり川くまよりくうり池の蟠り
ろ池水となり煙して失よろり
龍女の事を上よまんとして南方無垢世界へ由仏せ
佛をし放ましいえくりし三井寺にきぬ
文と引つき猿沢の池に奈良の里を去り大津よりて
今様とまうの入を長手鶏よりすみ鶏を乱
とひろの事なれへ子むろありしといへんなあ

[illegible]
とりて陸士[illegible]文集巻三[illegible]
と[illegible]

上賀茂山本佐兵衛母　同取智久　江戸喜多左大夫能師七大夫孫
今出川邊浄春　半兵衛　田中禪門　繪師宇兵衛
紀州快月院今出川永壽昌出元的居士　施主賀宗林　上田屋清閑　上賀茂
栄春　本阿弥厨子妙賛　上賀茂慈春　白川浄西　蛸茶師
寺町入邊昌榮　出水行志惠女子利年　賀茂成好
本阿弥圖子妙三　共依助縁之功必至者歟